古事記「志良宜歌」考

一瀬幸子

古事記の木梨の軽の太子の御歌の条に

天皇崩りまして後、木梨の軽の太子、日継知らしめすに定まれるを、いまだ位に即きたまはざりしほどに、同母妹軽の大郎女にたはけて、歌ひ給ひしく

あしひきの　山田をつくり
山高み　下樋をわしせ
下娉ひに　吾が娉ふ妹を
下泣きに　吾が泣く妻を
今夜こそは　安く肌触れ。

こは志良宜歌なり。（武田祐吉校註、記紀歌謡集）

とある。「志良宜歌」は前記の他に、日本書紀に歌詞に少しの相違と、「志良宜歌」の註記はみられぬが、同歌が記載せられ、又、琴歌譜には「茲良宜歌」と名付けられている。

而して、「こは志良宜歌なり」とは如何なる事を意味しているのか。従来これについては歌謡の曲節による曲名に異説はなく、唯、曲名の由来について次の二つに分類されるようである。

(1) 後挙歌を切めたる名とする説

古事記伝（本居宣長）。日本歌謡集成（高野辰之）。文学辞典（藤田徳太郎）。記紀歌謡（次田潤）。古代民謡史論（高木市之助）。上代歌謡の研究（安田喜代門）。

(2) 新羅歌謡の曲節により新羅歌と訓じたと解する説

上代の歌謡（土田杏村）。古語大辞典（松岡静雄）。

即ち、従来、宣長等の「シラゲウタ」と訓んで、尻上歌の約と解してきたのに対して、(2)に於いては、志良宜歌の形式を新羅郷歌と比較した結果、郷歌の十句体歌が、「志良宜歌」として採択せられたのであり、「シラギウタ」と訓むべきである、と説明していられる。

これについて、安田喜代門氏は、「上代歌謡の研究」に於いて

「両説の可否を検するにはまづ宜の音が、ゲかギかを決しなければならないが、古事記に於いて宜は決してギの仮名には用いられず、皆ゲの仮名として用いられているのである。

古事記の歌謡の仮名において宜は六回用いられているが、皆ゲとよまねばならぬ。この点から尻上の意にとるのは、にはかに捨てられない。」と論じていられる。

土田氏は又、「上代に於いて「宜」を「ギ」と訓んだ例があり、また「宜」は元来漢呉音共に「ギ」と訓むものであるとすれば、我々は古事記の「志良宜歌」を「シラギ歌」と訓んだとしても、決して不当のもので無い。」

と論じ、万葉集巻十四の東歌を引用し、更に、東歌に限り「宜」を「ギ」と訓んでいるのについて、新羅人の移民が東国に多かつた事を論証していられる。（上代の歌謡）

さて、以上の論争は別として、私は、この木梨の軽太子と軽大郎女の物語の作歌事情を考察してみたい。

（以下歌番号は武田祐吉校註「記紀歌謡集」に依る）

允恭天皇崩御の後、その皇子木梨の軽太子は同母妹の軽大郎女に通じて「あしひきの山田をつくり山高み下樋をわしせ下娉ひに吾が娉ふ妹を下泣きに吾が泣く妻を今夜こそは安く肌触れ（志良宜歌の註記あり）記七九」「笹葉に打つや霰のたしだしに率寝てむ後は人は離ゆと

も。愛しと　真寝し真寝てば　刈薦の　乱れば乱れ

真寝し真寝てば（夷振の上歌の註記あり）記八〇、八一」の三歌を歌われる。この事が世に洩れて百官及び天下の人等は、軽太子に脅き穴穂の御子に依つたので、軽太子は大前小前宿禰の家へ逃げ込まれた。御子は追い討つて宿禰の門前に迫られ「大前小前宿禰が金門蔭かく寄り来ね雨立ち止めむ（記八二）」と歌われるので、宿禰は之をとどめ「宮人の足結の小鈴落ちにきと　宮人動揺む里人も斎め（宮人振の註記あり）記八三」

と歌つて、軽太子を捕えて差出した。悲しみの太子は「天飛む　軽の嬢子　甚泣かば　人知りぬべし　波佐の山の　鳩の　下泣きに泣く（記八四）天飛む　軽嬢子　したたにも　倚り寝て通れ　軽嬢子ども（記八五）天飛ぶ　鳥も使ぞ　鶴が音の　聞えむ時は　吾が名問はさね（記八六）この三歌は天田振の註記あり」と歌われ、嬢子への深い愛情を示される。かくて、伊余の湯に流される事になつた太子は「大君を　島に放らば　船余り　い帰りこむぞ　吾が畳斎め　言をこそ畳と云はめ　吾が妻は斎め（夷振の片下の註記あり）記八七」と歌つて嬢子との別れを惜しまれるのである。これに対し軽郎女は「夏草のあひねの浜の　蠣貝に　足踏ますな明かして通れ（記八八）」と歌つて太子への思いやりを示し、何時までも還らぬ太子をしのんでは遂に悲壮な決意を示して「君が行き　け長くなりぬ　山鉏の　迎へを行かむ待つには待たじ（八九）」と伊余行を決行するのである。そして、「隠国の　泊瀬の山の　大峡には　幡張り立て　小峡には　幡張り立て　大峡にし　汝がさだめる　思ひ妻　あはれ　槻弓の　伏る伏りも　梓弓　立てり立てりも　後も取り見る　思ひ妻あはれ（記九〇）」又、「隠国の泊瀬の川の　上つ瀬に　斎杙を打ち　下つ瀬に　真杙をうち　斎杙には　鏡をかけ　真杙には　真玉を掛け　真玉なす　吾が思ふ妻　在りと　いはばこそよ　家にも行かめ　国をも偲ばめ（読歌の註記あり）記九一」は測り知れぬ嘆きの裡に発した太子の魂の叫びとなり、この物語は終るのであるが、この一群の歌物語の中の十三首の歌が、それぞれの場に応じた曲調を以て謡われたのではあるまいか。即ち、木梨の軽太子と同母妹軽大郎女との悲恋を中心として、皇位継承の争の物語が、志良宜歌、夷振の上歌、宮人振、天田振、夷振の片下、読歌などという曲名付きで謡われたのであろう。「あしひきの山田をつくり　山高み　下樋をわしせ　下娉ひに云々」と歌い出される太子の熾烈な心情は、次第に尻上りに高潮して、記八〇、八一の歌となり、烈しい情感の吐露が「夷振の上歌」として歌われたのであろう。そして、太子の配流を頂点として、傷心悲痛の叫びとなり、哀憐の詞となり、又、将来へのはかない望みとなり、又感傷となり、時には相手を慰藉して自信に満ちた大きな情緒となり、この時と所とに拘らず常に相手を忘却せざる凝集性は、遂に死をもとした郎女の伊余湯行となり、こゝに両者の運命は決定づけられて、軽太子の悲痛な恋愛感情を読歌として、声をしづめ、声を長めて、朗詠的に唱え、この恋愛抒情詩を謡い終つたのではあるまいか。

以上によつて、私はこれらの歌を歌謡とみた場合、「こは志良宜歌なり」の註記は、その所伝を信ずる限り、その歌詞の成立と同様に見るべきものであり、宣長等の指摘した如く、「掻上」を「加々宜」Kakiage＝Kakage「指上」を「佐々宜」Sasiage＝Sasage と約めると同様に、後挙歌を志良宜歌 Siriage＝Sirage と約める事は自然であり、志良宜歌は、歌の後の方を乙の声より甲の声に挙げて歌う後挙歌の約つた名、即ち「シラゲウタ」と解するのが妥当であると考えるのである。

（第一回卒業・熊本女子大学勤務）